試験調査船おやしお丸成果報告会から

おやしお丸によるサハリン訪問航海について

大槻　知寛・田中　伊織

キーワード：おやしお丸、サハリン、ホルムスク、日ロ研究交流

1990（平成２）年８月末竣工した３代目おやしお丸の19年間半にわたる航海の中で、唯一外国（サハリン）へ寄港した航海がありました。それは、新造された翌年の1991（平成３）年４月、第２回日ロ研究交流で、おやしお丸は小樽市からホルムスク（旧真岡）へ乗り入れています。ここでは、おやしお丸の歴史の中にあった、この特別な航海とその意義について紹介します。

北海道とサハリンの間は、43kmほどの距離しかない宗谷海峡（国際的名称は「ラ・ペルーズ」海峡）で隔てられています。このわずかの距離の海でつながり、互いに共通の重要水産資源を利用している中で、1980年代まで互いの研究機関同士の交流はそれまで皆無の状況でした。

ところが、1989（平成元）年11月に、当時のサハリンチンロ（ソ連邦太平洋漁業海洋学研究所サハリン支所）ルフロフ所長から稚内水試場長あてに、研究交流を求める書簡が突然ファックスで届きました。この真意を探るため、1990（平成２）年６月、稚内水試尾身漁業資源部長、釧路水試高研究職員による事前訪問が行われました。

しかし、当時のサハリンは、旧ソ連（ソビエト社会主義共和国連邦）の厳しい体制下にあり、北海道はむろん日本から直接サハリンに行く交通手段はありませんでした。サハリンは、新潟からハバロフスク経由で、３日間もかけなければ行けないような近くて遠い地でした。第２回日ロ研究交流で、調査船で直接訪問するというアイデアの背景には、このような交通手段の不便さという理由があったことは言うまでもありません。

図１　本稿に関係する日ロの各都市

第２回の訪問日程は下記のとおりで、新年度早々の４月２日、おやしお丸（布川船長ほか19名の乗組員）と共にホルムスク港に降り立った研究交流訪問団は中央水試の村上副場長、小笠原海洋部長、釧路水試高研究職員の３名でした。

1991年４月１日（月）JST（日本標準時間）10時、小樽出港。

４月２日（火）JST 09時（サハリン時間11時）、ホルムスク港西方12海里地点に達し、ソ連の領海に入る。10時（同12時）無事入港、10時半（同12時半）着岸。

４月３日（水）－４日（木）ユジノサハリンスク

市のサハリンチンロで研究交流とコルサコフ（旧大泊）でのサハリンチンロ調査船イゴーリ・マクシモフ号の見学等。乗組員は「船員手帳」でホルムスク市内だけ見学。

４月５日（金）サハリンチンロからルフロフ所長以下５名がおやしお丸見学。JST 10時（サハリン時間12時）ホルムスク港出港。

４月６日（土）JST 09時、小樽港帰港。

ソ連国内に調査船で直接乗り入れることには、旧体制の厳しい環境下にあったサハリン側では国境警備隊の許可等、日本側ではココム（対共産圏輸出統制委員会）に関わる電子機器類持ち込みの懸念（当時おやしお丸は最新鋭の観測機器、航海計器などを備えていた）等の課題がありました。これらの課題で関係機関と種々協議し、事前折衝の直接窓口となった企画情報室佐野補佐（現中央水試場長）は気苦労が多かったと推察します。

実際にホルムスクへ入港する際は布川船長が一番苦労されたと推察します。また、この時には現地無線局等との具体的な連絡方法も心配されていました。これには、ロシア文にふりがなを付け、それを見ながら国際VHFでコールした模様でした。ロシア語に精通していた高研究職員は、研究交流で通訳としても活躍されたと推察します。

この訪問は、日ロ研究交流の歴史から見て重要な意味を持っています。それは、調査研究に関する事項について初めてのプロトコル交換がルフロフ所長と村上副場長との間で行われ、この訪問から、現在まで継続する相互訪問方式による定期的な日ロ研究交流が始まっているからです。この時、おやしお丸が日ロ間の直接の「架け橋」となり、その後、研究交流が本格的に発展していくことになりました。

写真１　４月２日、ソ連の領海に入り、ホルムスク（ロシア語で「岡の街」の意）市を望む

写真２　４月５日、チンロサハリン支所からルフロフ所長ら5名来船、見学交流

写真３　４月５日出港時、タラップ付近の様子

（本文中の役職名は当時のものです。また、本稿では、図書室書庫で保管されている、訪問団の小笠原部長撮影の写真を使用させて頂きました。）

（おおつき　ともひろ・たなか　いおり
中央水試海洋環境部　　報文番号B2325）